

開催地名	沖縄県恩納村
開催日時	令和 5 年 9 月 14 日（木） 13：50 ～ 15：40
開催場所	恩納村立うんな中学校
語り部	伊藤 正治 （岩手県大槌町）
参加者	中学校 3 学年、村防災担当、村教育委員会 130 名
開催経緯	日本中で大規模な災害が頻発している中で、本村は海岸線に位置していることから今後、大地震や、津波被害を想定して備えを進めていく必要がある考え、中学生を対象として講演会を開催することで防災意識の向上、担い手育成に繋げるため、本講演会を実施することとする。
内容	【いきる・かかわる・そなえる東日本大震災津波を学ぶ】 1. 海に向かって開けた町～3分間で町が消える～ 岩手県大槌町はリアス式海岸に面し、面積 200.59 km²、人口 10,792 名の町である。夏には海水浴場も開かれておりその海は日本の海水浴場 100 選に選ばれるほど美しい海だ。 2011 年 3 月 11 日、美しい海は茶色く染まりたくさんの犠牲者を出した大津波となったのだ。当時の映像が残っている。避難所に指定されていた高台から撮影したものだ。遠くのほうから壁のような津波が押し寄せてくる。次第に避難者の声も大きくなり緊張感に包まれていることがわかる。防波堤はないもの同然に突破され住宅街にスピードを上げて津波は進む。独特な音をさせ、たくさんの煙を立てながら町を飲み込んでいく。この煙は家が崩れていく際に発生するものだ。いよいよ高台のすぐそこまで波が迫る。そこに映っていたのは逃げ遅れた数名の人だった。数秒後には一帯が水で染まった。恐らく助からなかっただろう。文に起こしたこの出来事は、たった 3 分間の出来事だった。犠牲者（死亡）1,286 名（412 名が行方不明者）建物被害（全壊）4,104 棟となった。 2. 被害を大きくした原因 地震発生後、町に避難指示が鳴り響いた。防災無線は、情報がかなり曖昧なものだった。また、津波が来る少し前には全く放送が流れていない状況だった。後でわかったことだが、地震・津波の影響で放送ができない状況になってしまっていたのだ。最初の避難指示から避難警告レベルが高まった頃には、すでに放送できなかったということになる。確かに放送が途絶えてしまったことも、被害が大きくなってしまった理由の一つだ。

だが、逃げ遅れた方はほとんどが「きっと大丈夫」「まさか」「みんな逃げていないから」と避難を躊躇してしまった方だとわかっている。また、高齢社会・車社会・情報化社会といった社会の風習が犠牲者を多くしてしまったことも考えられる。

誰かに身を任せるのではなく、自分の命は自分で守ることが必要である。被害は命だけではない。心もたくさん被害を受けた。とある中学生が次のように書き残している。

「当たり前とは何なのか。幸せとは何なのか。家族がいて友達が生きていてくれることを幸せというのではないのだろうか…」

3. 機能を失った役場

私（伊藤氏）は、津波が来た際に、役場の庁舎にいた。ゴゴゴゴと音を立て津波が来たことに気が付いた時には2階におり、慌てて部屋を出て廊下を行くと床が津波によりつきあがり天井と床に挟まれ身動きが取れない状態になってしまった。命からがら庁舎屋上に移動すると、町はすでに姿を変えていた。津波は1回ではなく何回も押し寄せた。庁舎の下を見ると自分の部下が数名取り残されていた。

助かった者もいたが、目の前で飲み込まれ沈んでいく部下も見た。私は何もできなかった。今でも夢を見る。似た人がいると立ち止まりその方ではないかと確認してしまう。

津波は町の情報（書類・パソコン・ハードディスクなど）をひとつ残らず飲み込み、職員の命をたくさん奪っていったのだ。情報もなく人もいない。役場の機能は完全に失っていた。そんな時に、全国からボランティアや医師団などが駆け付け我々の町を救ってくれた。私自身、沖縄から来た医師団に救われた。挟まれたときに骨折をしていたようで、気づかずに動き回っていたところ、手当を受けた。いつか直接お礼が言えたらと想いながら生きている。

4. 避難所運営

避難所では、パニックが起こり譲り合いもなく、まさに混乱無秩序状態であった。衛生環境もかなり悪化し、感染症の恐れまで出てきたほどだ。中でも一番困ったのはトイレだ。避難所の対応は段ボールにビニール袋を引き、用を足すものだった。溜まれば誰かが処理をしなければいけない。決していい仕事とは言えないことを中学生生徒が引き受けてくれたのだ。これだけではない。清掃活動、支援物資の配達、水汲み、来所者への対応などを、小中高生が担当決め行っていた。この姿が、大人の元気の源になった。ふさぎ込んでいた高齢者も炊き出しを手伝うようになり、どんどん復旧へと進めていったのだ。大人も、子供も一人一人が今できることを再確認し協力しあうことで避難所はより快適な場所になると経験した。

	日頃から、防災意識を高めることは大切である。統計からすれば、大きい震災・津波は50年に1度来ている。人生100年と考えれば2回は経験することとなる。 では、もし災害にあってしまったらどうすべきか、どこに逃げ、家族とはどのように連絡を取り合うかを今から決め、災害時パニックにならない備えが必要である。すべてを奪った震災・津波だが、得たものもある。父親が未だに行方不明の少女（当時中学生3年生）がこんな言葉を残している。 「私は震災を通して、家族・友達・先生・地域の温かさに触れました。失ったものは多いけれど、手に入れたものもありました。」  
開催地より	実体験に基づく、災害直後の街や避難所の様子や課題など分かりやすくご説明頂きました。また、長引く避難所生活では地域住民が助け合う「共助」の大切さや自分の身は自分で守る「自助」が防災対策の基本であることを教えていただきました。 今後も、自主防災組織の担い手となる若年層への防災意識向上を図る取り組みを行っていき、住民に対しての防災意識の強化と、防災訓練の継続的实施に努めていきたい。